

広告主名	大賀薬局	期間	2025年11月1日 ～ 2026年3月31日
プロダクト・サービスブランド名	おいしいプラセボ（やくいくプロジェクト）	地域	九州
施策名	おいしいプラセボ	使用媒体	オンラインフィルム/店頭/イベント

1. 施策を行った背景や課題

本取り組みは、子どもの頃から正しい服薬習慣を身につけることを目的とした、行動変容型の薬育サービスである。日本では現在およそ1,000億円分の残薬が発生しており、その背景には「薬の価値が正しく伝わらないまま消費されている」という構造的課題があると考えた。

そこで大賀薬局は、薬を使わずに“飲む行為”そのものを体験できる「おいしいプラセボ」を開発。子どもが自分専用のプラセボボトルを作り、保護者や薬剤師と飲む量・時間を約束し、記録・達成を重ねることで、服薬行動をポジティブな体験として定着させる仕組みを構築した。

本取り組みの価値はモノではなく「習慣」である。薬を売る前に、薬を向き合う姿勢を育てるという新たな薬局の役割を提示した。

2. 解決方法（SOLUTION）

従来の薬育活動は「正しい飲み方を伝える」という啓蒙型コミュニケーションに留まりがちであり、理解は得られても行動の定着まで至りにくいという課題があった。大賀薬局でも2022年から薬育プロジェクトを継続してきたが、習慣化という価値は目に見えにくく、伝達や評価が難しいという壁に直面していた。そこで本取り組みでは、薬の知識を伝えるのではなく「飲む行為そのものを体験として設計する」ことにマーケティングの軸を置いた。おいしいプラセボは、薬を使わずに服薬行動を疑似体験できる仕組みとすることで、親子の約束、記録、達成という一連の行動を自然に生み出す。啓発を“体験化”し、教育を“行動設計”へと転換したことで、薬局は単なる薬の提供者から、生活習慣を育てる伴走者へと役割は進化した。大賀薬局の標榜する「薬を減らす薬局」の実現へ向けて大きな一助となった。

3. 結果

やくいくプロジェクトは2022年の開始以降、福岡市近郊および鹿児島市近郊の幼稚園・保育園・小学校を中心に継続的に実施してきた。これまでに幼稚園・保育園351園、小学校33校、計384施設で展開し、延べ42,237人の子どもたちが参加しており、単発イベントではなく、地域に根ざした教育活動として広がりを見せている。2025年度から導入したおいしいプラセボは、そのやくいくプロジェクトを、理解を促す教育活動から、行動を定着させる仕組みへと進化させるものである。従来は、正しい服薬の重要性を学んだ後、家庭内で行動が継続したかを把握することが難しかったが、本取り組みでは、飲む時間や量を親子で約束・記録し、達成を薬局へ持ち帰る体験設計により、服薬行動そのものを可視化することが可能となった。また、子どもを起点とした設計により、親世代・祖父母世代へも自然な意識波及が生まれ、家庭単位での服薬意識の向上が期待される。

4. 企画のポイント

大賀薬局の標榜する「薬を減らす薬局」を実現するために、子どもに対して薬を使わずに服薬習慣を身につけてもらうということが、本取り組みの目的である。実際に、イベント実施後に行ったアンケートでも、家にお菓子のボトル（プラセボボトル）を持ち帰り、父母や祖父祖母に子ども自身が啓発を行うなどの現象が見られている。

コロナ禍をきっかけに何かできることはないか、と始められたやくいくプロジェクトを「プラセボ」という子どもたちにとってもあまり聞き覚えのない概念をあえて用いること。そして何より、毎日続けたいというコミュニケーション設計を行うことに注力した。

おかしなおくすり爆誕？子どもたちへの薬育を推進するための新プロジェクト。

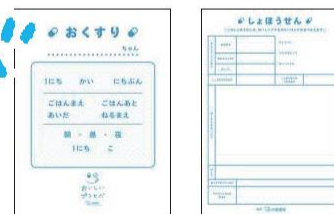
STEP1 マイボトルをつくろう

STEP2 お菓子を詰めて「飲む時間」と「量」をお約束

STEP3 やくいく手帳に記録しよう

STEP4 正しく飲みきったら大賀薬局へ

プレゼント
用意してます



mission

今日本ではおよそ1000億円分の薬が飲まれずに余っていると言われています。大賀薬局ではその「残薬問題」に強い危機感を持ち、子どもの頃から薬との正しい付き合い方を学ぶことが、未来の社会全体の健康につながると考え、2022年度から薬育プロジェクトに取り組んできました。



idea

そのプロジェクトの一環として2025年度から始めた取り組みが「おいしいプラセボ」。これはお菓子を薬（＝プラセボ、偽薬）と見立て、自分で決めた量、決めた時間を親や薬剤師と「おやくそく」。愛着が湧くよう、自分でデコった自分専用の「プラセボボトル」を作るワークショップを新しい薬育プログラムにしました。

result

プロジェクトはまだ始まったばかりですが、イベントを行うと毎回数多くの参加者が集い、自宅でもきちんとルールを守って「おかしなおくすり」を飲んでくれています。2022年より始まった薬育プロジェクトに参加してくれた子供はすでに4万人以上。これから数多くの子どもたちの笑顔を守り、大賀薬局の標榜する「薬を減らす薬局」の実現を目指します。